

加賀藩前期の医者と金沢城内での医療

池田仁子

はじめに

近世城下町金沢における生活や医者については、生活史の分野から⁽¹⁾、或いは生活の中の疾病史⁽²⁾や生活文化史の立場から医者と蘭学との関わりに関して論じたものなどがある⁽³⁾。こうした中、藩老横山家の下屋敷の解読調査をはじめ⁽⁴⁾、近年石川県立図書館蔵「寛文七年金沢図」（以下「寛文七年図」と略記）の解読・データ作成が進められ⁽⁵⁾、さらに藩士の配置と都市計画に関する研究がなされた⁽⁶⁾。筆者も右「寛文七年図」及び「延宝金沢図」（以下「延宝図」と略記）という2点の城下町絵図にみる医者の居住地と加賀藩主前田家における城内での医療について考察した（以下、前稿と略記）⁽⁷⁾。

しかし、寛文7年（1667）前後、或いは近世前期における医者や城内での医療、または彼らの役割や動向など前稿が不十分であり、さらに調査研究を深める必要のあることを痛感している。そこで本稿では、藩や前田家の医療に関わった医者などを中心に、加賀藩前期の医者と金沢城内での医療について、主に「寛文七年図」・「延宝図」といった城下町絵図や慶長（1596～1615）から元禄元年（1688）までの侍帳及び重臣の日記「前田貞親手記」（金沢市立玉川図書館加越能文庫）21～40巻（元禄元年9月～同10年）より考察したい。

最初に、侍帳及び「寛文七年図」・「延宝図」の中から、どのような医者がいるのか検索・抽出し、各侍帳等に記載された医者の人数なども含めて、近世前期の医者の概要を把握する。また、試みに元禄期の個々の医者の先祖が初めて医家として藩に召抱えられた時期などについて検証したい。次に、「寛文七年図」・「延宝図」記載の医者と屋敷拝領をめぐる問題について述べる。さらに、元禄年間これらの医者が城内でどのように藩主前田家などの医療実務を行なったか、金谷・二ノ丸両御殿の利用に絡めながら素描する⁽⁸⁾。特に、従来金谷御殿は6代藩主吉徳の時代から子弟や側室の住居が建立されたとするが⁽⁹⁾、これより1世代前、すなわち5代藩主綱紀の代の貞享4・5年（1687・88）・元禄期よりすでに同御殿が前田家の居住空間として機能していた様子について、前稿に引き続き考察する。最後に、京都より金沢へ下向する医者の問題や城内での藩士の治療など医者をめぐる諸相を垣間見る。

こうした一つ一つの事例を見ていく基礎的研究の積み重ねこそが肝要と考え、医者・医療からみる城下町の生活史解明の一助にしたい。

1 「寛文七年金沢図」等城下町絵図及び侍帳に記載の医者

(1) 近世前期医家の名前と人数

侍帳について、『加賀藩初期の侍帳』（復刻、石川県図書館協会、昭和45年）の記載に関し、石高等の内容が真にその年代の時点のものかどうか確証がないともいわれ⁽¹⁰⁾、或いは、単なる誤記のある場合も考えられるゆえ、個々の事例を検討していくしかなさそう。ともあれ、前稿でもみたように「寛文七年図」のほか、このように侍帳にも若干の誤記や脱漏も認められるが、医者についての概要を把握するうえでは、それほど差し支えないものとみられる。

以下、各侍帳と「寛文七年図」・「延宝図」に見える医者をそれぞれ検索・抽出し、[表1A] [表1B]に示してみた。

これら[表1A] [表1B]において、まず、人数については、町医者身分の記載を含み、且つ江戸詰・京都詰などの医者が無記載である「寛文七年図」・「延宝図」を除外してみることにする。それぞれの侍帳・分限帳の記載の仕方が必ずしも一定でなく、記載漏れなども考慮する必要があるが、侍帳・分限帳だけをみると、元和が9人で最少人数だが、慶長が10人、寛永が14人、万治が18人、寛文

[表1A] 慶長～寛永期の侍帳に記載された医者一覧

	①慶長年中御家中分 限帳〔1596～1615〕	②元和之侍帳 〔1615・16頃〕	③寛永4年侍帳 〔1627〕
1	坂井寿庵（200石）		○「就安」
2	*内山覚中（300石）	○	○
3	山科長庵（澄庵）（300石）	○	
4	沢田道加（150）	○「道才」	○「道可」
5	*飛鳥井里庵（100石→200石）	○「理安」	○
6	道甫（200石）		
7	高田慶庵（300石）	○	○
8	藤田道閑（200石）	○（100石）	**藤田道仙（220石御馬出）
9	不破養軒（150石外科）	○	○
10	名倉不乱（100石）		○
11		山科理庵（200石）	
12		道甫（200石）	○
13			津田宗意（150石）
14			覚与（200石）
15			小林又右衛門（150石ママ）
16			小林幸庵（100石）
17			堀部休庵（100石養叔父）
18			**大石玄哲（500石ママ細工町）
19			**加藤正悦（200石御馬出）
合計	10（無役衆中）	9（無役衆中）	14（御薬師）

8年が22人、同11年が26人、延宝3年が29人、同5年が26人、元禄元年が28人というように、慶長から元禄元年にかけて、次第に医者的人数が増加傾向にあることがわかる。また、医者に関する取扱方も無役（衆）、御薬師衆、医師（者）、或いは個々に組外として記載するなど区々であるが、およそ慶長・元和頃は無役衆、或いは寛永期までは薬師衆、万治以降は組外として組織されていたことがわかる。このうち、万治以降をみると、およそ組外組のうち、上記の医者的人数の割合は29～43%ほどで、時代が下がるにつれ、医者的人数増加に伴い、その割合も高い傾向にあった。なお、藩士全体の中で、医者 の割合は1～2%程度に過ぎないことが確認できる。

次に、「元禄元年侍帳」（〔表1B〕）記載の医者28名の藩医について、各家はそれ以前、慶長以降、どこまでさかのぼれるか。試みに藩に医家として召抱えられたのはいつの時期か、医家として本人と前代、前々代等の人物を各侍帳と照合してみるため、〔表1B〕では分類の欄を設けてみた。そして、慶長までさかのぼれることのできる家や慶長よりほぼ全期に亘ってある家をa、元和期以降よりある家をb、寛永期以降をc、万治以降をd、寛文期以降をe、延宝期以降をf、元禄期に初出の家をgとして、それぞれ当てはめてみた。この場合、医家としてどの時期を始祖とみることができるかを把握するため、間が2、3欠けていても初出とみなした。

すなわち、藤田玄碩・坂井就安・高田祐庵・内山三清・不破養伯・坂井泰順・山科長安の7人の医家がaで、bが0人、大石三折・加藤玄好・堀部養叔・堀部養碩・堀部養寿の5人の医家がc、佐々長琢・久保寿静・江間口安・堀宗叔・江間口竹・江間慶嘉の6人の医家がd、富山周甫・馬嶋柳庵・亨徳院・鈴木道倫・能勢玄竹・矢田周閑・山脇順永・佐々木宗甫の8人がe、加木道意・端玄川の2人がgに相当する。つまり、a⇒7例、b⇒0例、c⇒5例、d⇒6例、e⇒8例、f⇒0例、g⇒2例である。換言すれば、元禄元年の医者を中心にとみると28名の医者においては、医家としての初出の人数は、e⇒8例であることから、寛文期に初出の家がもっとも多く、医者に関して、寛文

〔表1B〕 万治～元禄元年の侍帳・絵図に記載された医者一覧

	④万治2年与外人人数之帳〔1659〕	⑤寛文8年加越能士帳〔1668〕	⑥寛文11年侍帳〔1671〕	⑦延宝3年御中侍帳〔1675〕	⑧延宝5年侍帳〔1677〕	⑨元禄元年侍帳〔1688〕	⑩寛文図〔1667〕	⑪延宝図〔1673〕	分類
1	☆藤田道仙（220石）	○（★玄碩150石）	玄碩（150石41才）	○	○47才西町	○	○「三雪」	○「玄碩」	a
2	坂井寿庵（200石51才）	○	○63才	○	○御番薬師67才西町	○「就安」	○就安	○	a
3	高田祐庵（200石38才）	○	○50才	○「友庵」	○56才千石町	○	○	○	a
4	内山寛中（100石65才）	○	○77才	○	三清（10人扶持53才堤町後）	○	○	○	a
5	不破瑞庵（150石外科江戸49才）	○「瑞安」	養伯（外科36才）	○		○	○養伯	○	a
6					坂井泰順（30人扶持親寿庵一所）	○200石			a
7						山科長安（600俵）			a
8	☆大石玄哲（大津着米200石）	○大津着米200石加州米25石	三折（大坂着米400俵39才）	○（200石）	○「三哲」400俵御番薬師45才西町	○	○「玄哲」	○「三雪」	c
9	☆加藤正悦（200石）	○	○76才	玄好（10人扶持）	○西町	○	○正悦	○玄幸	c
10	堀部養叔「養散」200石39才	★○	○51才	○	○女中薬師57才土方前	○300石	○	○	c
11				堀部養碩（20人扶持）	○父養叔一所	○			c
12						堀部養寿（10人扶持）			c
13	佐々玄隆（150石41才）	○「玄院」（★快庵）	○「快安」57才	佐々長琢（10人扶持）	○	○		○長琢	d
14	久保寿斎（100石針立51才）	★○	○65才	○「寿安」	寿静（浦末寺前）	○	○	○	d
15	江間竹林坊（30石歯薬師72才）	○	○47才100石	○		口安（60俵）			d
16			堀宗叔（外科150石31才）	○	○37才坂井与右衛門向	○			d
17						江間口竹（10人扶持）			d
18			江間慶嘉（60俵42才）	○「慶賀」（30石）	○60俵堤町西町後	○	○	○	d
19		富山周甫（判金2枚）	○（外科200石61才）	○	○67才袋町	○			e
20			馬島大知坊法橋（目医師黄金5枚69才）	○300石（ママ）	○（金子5枚75才御貸小屋）	馬島柳庵			e
21			亨徳院法眼（大坂着米300俵41才）	○「幸徳院」500表	○京薬師47才御借し小屋	○300俵			e
22			鈴木道倫（300石54才）	「鈴木道悦」	「道倫」江戸	○	○道悦	○	e
23			能瀬玄竹（外科150石44才）	○	○50才彦三5番町	○	○「能勢」	○	e
24			矢田周閑（外科150石45才）	○	○柿木昌	○	○	○	e
25				山脇順永（20人扶持）	○父玄悦一所	○200石			e
26						佐々木宗甫（10人扶持）	佐々木寿徳	○	e
27						加木道意（600俵）			g
28						端玄川（600俵）			g
29	高田慶庵（300石52才）	○							
30	小瀬甫庵（200石52才）	○	○64才医師書物奉行	順理（御子小將とも）	○		○	○順理	
31	☆延原友碩（300石外科）	○							
32	☆堀宗佐（150石53才）	○	○（外科小判10両65才）		○隠居宗叔一所		○	○	
33	小林幸庵（100石外科70才）	○		○（「金宿」）			○		
34	佐々正益（50石76才）	○（★300石）	玄養10人扶持21才	○「玄安」（10人扶持）	○（26才高岡町）		○正益		
35	☆江間慶重（慶全、銀5枚歯薬師35才）	○（★慶寿100石）					○「慶寿」	○「江間」	
36		★堀部養佐（150石）	○40才	○	○御番薬師46才安江木町		○	○	
37			★山脇玄悦（200石57才）	○	○女中薬師63才彦三町		○	○	
38		岸玄古（小判10両外6人扶持）					○		
39	藤田寿斎								
40			生田丈仙（外科黄金5枚外30人扶持36才）	○					
41			名倉幸春（外科150石46才）	幸伯（10人扶持）	○長町		○	○幸伯	
42				佐々宗庵（針師80石）					
合計	18（組外62人中29%）	22（組外60人中37%）	26（組外76人中34%）	29（組外67人中43%）	26（組外74人中35%）	28	23	21	

※〔表1A〕〔表1B〕において、①⑦は金沢市立玉川図書館加越能文庫「慶長・延宝加陽分限帳」、④は同「古組帳抜萃」、⑨は同文庫蔵、②③は『加賀藩初期の侍帳』（復刻、石川県図書館協会、昭和45年）、⑤は岡山大学図書館池田家文庫蔵、⑥は石川県立図書館森田文庫蔵、⑩⑪は同館蔵「寛文七年金沢図」「延宝金沢図」＜池田仁子『寛文七年金沢図』等にみる医者の居住地と城内での医療〔表1〕『金沢城研究』8号、平成22年＞、⑧は同県立歴史博物館蔵（十村後藤家文書）より作成。各時期の○はそれぞれ前時期・前々時期と同様の場合を表し、異なる表記のある場合は原則として「」で表したが、音読みが等しい場合などはその表記を割愛した箇所もある。また、①の☆は『加賀藩初期の侍帳』所収「慶長十年富山侍帳」に記載の人物を、③の**は同書所収「寛永十九年小松侍帳」に記載の人物、⑤⑥の★は同じく「寛文元年侍帳」記載の人物を、④の☆は「古組帳抜萃」中の万治元年・小松組外分知行高・御切米高并定役懸・歳付之帳」記載の人物をそれぞれ示す。合計欄は人数を示すが、（ ）は医者 の 占める割合を表す。なお、延宝図の年次比定は上記金沢城調査研究所『金沢城研究』3頁に依る。また、年令等につき誤記とみられる箇所も史料通りとした。

11年の侍帳がほぼ完備しているものとすれば、このころ医者職の職制がほぼ固まったものとみられる。また、a ⇒ 7例であることから、慶長期に藩医の祖形ができているといえよう。さらに、f ⇒ 0例であるゆえ、少なくとも延宝3年～同5年の間での新規取立ての医家はなく、それ以降元禄元年までの間で、2家が藩医として新規に召抱えられたということになる。

ところで、延宝5年侍帳をみると、組外組は不破彦三・富田治部左衛門の裁許と見え、医者も当然この中に組込まれている。「諸頭系譜」（金沢市立玉川図書館蔵）によれば、不破・富田の両人はこの時奏者番であり、寺社奉行になるのは不破が元禄4年（1691）、富田が延宝6年（1678）である。これに基づけば、延宝5年段階で医者は奏者番支配であった印象を受ける。因みに、近世中期の「享保九年士帳」（加越能文庫）では「御医師寺社奉行支配」と記され、藩医は寺社奉行の支配下に置かれている。しかし、近世初期においては身分階層そのものが形成途上にあり、多分に流動的な要素を含んでいたといい、裁許や支配、申渡・上申など伝達システムといった点からみても、流動的であり⁽¹¹⁾、前稿でみた堀部養叔の養子一件においてもそうであったように、「諸頭系譜」の記述だけでは判然としない部分のあることも否めない。ともあれ、延宝5年段階で医者が藩主家のための重要な位置にあったことは、近侍御用のうちの奏者番配下であった点よりも窺うことができよう。

（2）「寛文七年金沢図」・「延宝金沢図」と居屋敷拝領の医者

これまでみてきた慶長から元禄元年の医者職の知行高などについては、知行取の者から切米取、扶持米、給金・給銀取の者など様々であるが、高知行の者をみると、寛永期小松の大石玄哲の500石（500俵の誤記であるとすれば250石）が最高である。また、300石（または600俵）から250石（または500俵）の者をみると、慶長の内山覚中・山科長庵・高田慶庵、万治以降の延原友碩、寛文期の佐々正益・鈴木道倫、延宝以降の亨徳院、元禄の加木道意・端玄川などである（〔表1A〕〔表1B〕）。これらの多くは京都や江戸との関わりが深い医者である点注目される。

ところで、藩より拝領の藩士の屋敷地の規模についてみると、慶長16年および万治2年に規定がなされている⁽¹²⁾。このうち、町医者並の者も170歩の屋敷地が与えられたのは万治2年であった。ただ、この場合、後述のように2年後の寛文元年に、医方も親と同様確かな嗣子の場合のみ屋敷拝領が可能であるという条件つきになるゆえ、すべての町医者ではなく、許可された医者のみであった。因みに、「寛文七年図」・「延宝図」には藩士や医者など、個々の屋敷地の寸法が記載されているが、現時点ではこの点は未調査である。今後、こうした屋敷地の規模などに関し、調査・解説及び侍帳との照合の上で、定書との比較検討も課題である。

さて、前稿では外総構堀の外側について、「寛文七年図」になく、「延宝図」のみに記載の医者に関しては未調査であるとしたが、その後調査を進めた結果、総構堀の外側に関し、「寛文七年図」で医者以外の屋敷地・地種の所が「延宝図」で、新たに医者の拝領屋敷に変わったというケースはないことがわかった。すなわち、両絵図における医者の記載は、総構堀の内側もしくはその近辺であり、その人数は、「寛文七年図」で42人、「延宝図」で41人程の結果を得たわけである。また、「寛文七年図」の42人のうち、侍帳等に無記載の者を御歩並身分の藩医と想定した者もいるが、これらの中には、以下のように一部町医者が含まれている可能性のあることがわかった。

すでに周知の史料「御普請会所御定書」の中では、（A）町医者にも屋敷が拝領される場合があった。すなわち、寛文元年（1661）年寄の今枝民部・奥村因幡・奥村河内・前田対馬から普請奉行（津田次郎左衛門・近藤新左衛門・久津見忠兵衛）に宛て、町医者の内、御屋敷拝領の者が死去したら屋敷を返上させるが、その嗣子が親に劣らず療治が上手なら、届け出によっては、引続きその屋敷拝領は可能であるという達が出された⁽¹³⁾。

このほか、「御屋敷方跡々格仕勤来候品之帳」（加越能文庫）、の中では、（B）「町医師之類御家中之面々より知行遣置候而茂御屋敷拝領仕事」の項として、元禄元年普請奉行の杉江平丞（重相）

の覚書によれば、町鍼科高桑玄春が本多安房より知行を拝領しているが、「町鍼科ニ御合力かた入」するものである故、屋敷を下賜するという例に基づき、家臣より知行を拝領している町医者にも屋敷が与えられる場合のあることがわかる。

さらに、同史料中（C）「貸屋舗仕事」の項で「町医師之内御屋敷拝領」の者が病死し、その倅が親と同様よく医療を成す場合は、跡屋敷は地子銀を納め、借りたき願を町奉行が奥書し、普請方役所へ届けば貸し置くというものである。因みに、「寛文七年図」・「延宝図」に記載された高木宗三が「永代地子」と見えることにつき（前稿〔表1〕）、右の例に相当する可能性もある。

以上、（A）（B）（C）の内容から、当時上級武士の家臣より知行を拝領しながらも、町医者身分の者が存在したこともわかり、さらに、彼らを含め、町医者身分であっても、藩から屋敷が与えられる場合や地子銀を納める形で、屋敷を借りて住む場合もあり、こうした町医者も、「寛文七年図」及び「延宝図」に記載されている可能性のあることをここで指摘しておきたい。

ところで、「前田貞親手記」元禄2年1月30日条の年始御礼の者の中に「町医師 藤田玄仙・渡辺玖庵・磯野玄察・黒川寛針」と見える。この4人はいずれも「寛文七年図」・「延宝図」の両図に記載された医者で、貞享4年段階では、ともに御目見願を出す、却下されたことはあるものの、翌年渡辺玖庵・磯野玄察は豊姫の診療を行っている（前稿）。また、のち黒川寛針の後裔は藩医となる。いずれにしても、部分的に城内の医療に関わっている医者を含むこの4人は、右史料に依れば、身分は町医者ということになる。しかし、現時点では「寛文七年図」「延宝図」の両絵図作成時期に、彼らが町医者であったということを確認することができない。詳細については今後の課題である。

右のうち、とりわけ藤田についてみると、前述のように「寛文七年図」及び「延宝図」には玄仙の名が記されているが、元禄2年時は町医者であるものの、寛文7年・延宝期も町医者であったとはいきれない。因みに、藤田家総体で考えてみると、近世前期の侍帳類の中では、藤田道閑（200・100・120 石）が慶長から元和・寛永4年（1627）までのものに、そして、同道仙（220 石）が寛永19年（1642）から万治2年（1659）・寛文6年（1666）のものに、さらに、この間同玄碩（150 石）が寛文元年から元禄元年のものにそれぞれ登載されている（〔表1A〕〔表1B〕）。一方、「寛文七年図」ではC地区に藤田三雪と同玄仙が通りを挟んで向かい側に住み、また、「延宝図」では三雪の地番に玄碩が、玄仙の地番に依然同人がそれぞれ居住している。玄碩の父は三雪と想定されるが、このC地区は大石玄哲・加藤正悦とともに小松より引越した医者が集住する辺りで（前稿）、城内に最も近い位置にあり、延宝5年（1677）侍帳が記載するように玄碩居住の西町に当たる。

このように考えると、玄仙は寛永期小松御馬出に居住していた道仙の系統を引く者とも考えられ、三雪と道仙は同一人の可能性もある。また、「寛文七年図」にともに藤田三雪と同玄仙が居住していることなどから両者は兄弟であろうか。そうであるなら、玄仙は玄碩の叔父ということになる。因みに、「諸士系譜」（加越能文庫）の藤田家では「玄徳（120 石、元禄2年没）— ○ — ○ — 道閑 — ○ — ○ — 道仙」など見え、藩医藤田家においては、近世中後期に先祖の名前を再び称していることがわかる。なお、貞享末から元禄期にかけ豊姫の診療を担当した「玄仙」は端玄川とみられる（前稿）。

以上のように、医者に関しては個別に見ていく必要があり、「小松侍帳」の大石・加藤・藤田家がC地区に集住しており、「寛文七年図」の絵図下の凡例註記に見える「小松より引越」した者等の居住位置を改めて確認することができる⁽¹⁴⁾。

2 藩主前田綱紀の様躰と金沢城二ノ丸での診療

次に藩主とその家族の診療に当たった医者の活動について述べたい。まず、藩主前田綱紀の様躰と金沢城二ノ丸での診療について「前田貞親手記」より〔表2〕にまとめた。

綱紀は前稿で触れたように頭痛・痰・御痞えなどの持病があったが、〔表2〕でわかるように、元禄元年12月にも、相変わらずこの持病に苦しんだ。明けて同2年正月、歯茎が腫れ、頭痛に加え鼻や

〔表 2〕 藩主前田綱紀の様態と金沢城二ノ丸での診療（「前田貞親手記」21～27 巻より）

元禄元年 12 月 〈46 歳〉	12 日少し持病が出て、通常より遅く九時宝門寺へ参詣。
元禄 2 年 正月 〈47 歳〉	6 日頭痛も鼻際の痛みも退かず。目や鼻中、頬、歯ぐきへも痛みが広がる。生姜を当て、灸をする と一時的に痛みが治まる。薬 2 貼調進。7 日脈浮立、鼻際の痛みや歯ぐきの痛みは退くが、眉毛の 辺が痛み、左鼻の息、におう。薬 2 貼調進。10 日持病退き、1 昨夜右側少しのぼせにつき、御飯・ 枝柿召上り、快調となる。薬 2 貼調進。13 日朝脈診、先日の痛みは退くが、新たに鳩尾御瘧、胸痛、 脇の横骨より「京（亨、肛カ）門」へ御つり、起居に指障り、背骨の上の方もだるく痛む。薬 2 貼調進。 14 日昨日の薬召上る。右京門の辺の痛み退き、腰痛も快然。鳩尾の瘧も過半回復。薬 2 貼調進。17 日昨 16 日夜、快調の所、寒気のため発熱。身柱の辺、背中張り、脈浮大、脈拍数多くなる。薬 2 貼調進。 18 日脈拍数減少、まだ少し浮大気味、頭痛少し弱まる。薬 2 貼調進。23 日鳩尾が御瘧にて指支え、 丸薬指上げ。
元禄 2 年 閏正月	2 日脈浮大、少し力有り、公務後、御瘧え、余寒甚しきため、御灸控え、煎薬 2 貼調進。6 日拝診中、 少し脈に力有り、頃日のぼせ、御瘧有り、なでても退かないため少しの間くつろぐ。後腰痛、随所 に痛み広がり、御灸所も決め難く、煎薬・丸薬を調進し、御瘧の回復を優先す。12 日脈拍数多く、 鳩尾張り、御瘧有り、背の上の方が痛み、咳・痰が少し出る。薬 2 貼調進。15 日脈少し浮大。発汗、 持病の御瘧の故かと思召。薬 2 貼調進。16 日脈診、風邪のためか、脈拍数多く、咳・痰多出、発熱。 痔痛有り、薬 2 貼調進。22 日頃日体調不良の所、1 昨日清快故、昨朝行水。昨夕より発熱悪寒有り、 不快につき御表へ出ず。24 日脈診の所沈数有り、悪寒有り、御表へ御出られず、薬がもたれると思召、 服用されず、御灸後心持ち快方、1 昨日行水後風邪患いと診断、薬 2 貼調進。25 日拝診、脈の乱れ有り、 咳・痰、悪寒、熱、頭痛は少し退くが、御身柱等が張り、痛み、薬 2 貼調進。
元禄 2 年 2 月	11 日脈診、少し浮大、脈拍数多く、御瘧も少し有る。風邪気味と言上。1 昨日の鷹場で少し風邪 引いたと仰。鼻・くしゃみ多く出、身柱に御灸。薬 2 貼調進。12 日脈診、脈沈み、脈拍数多く、風 邪は快方の旨言上。咳・痰多く出る旨仰。薬 2 貼調進。

眉の辺が痛み、また、胸から鳩尾・脇腹・腰にかけても痛みが起こり、痔痛のほか、1 回発熱があり、翌閏正月にも、のぼせ・腰痛・咳・痰が出て、風邪を引き、発熱 3 回、痔痛に苦しんだ。こうした二ノ丸の御居間廻りでの綱紀に対する治療は、御灸、煎薬・丸薬などの投薬でなされたが、前稿でみた貞享期より引続いて元禄元年より 2 年にかけて、当時主治医であった堀部養叔に依るものである。養叔の住居地は二ノ丸にきわめて近く、綱紀の信頼度は極めて高いものであった（前稿）。

しかし、時には次のような出来事もあった。元禄元年 9 月 27 日、養叔は前田対馬・多賀信濃に宛て次のように書付を出している。すなわち、夜前御用のため、御次へ御召になったゆえ、夜中行歩に時間がかかるので、急ぎ登城したいと思い、迎えの小者が金谷御門より通行して良いと広式よりいわれたと申し、明乗物で右御門を通り、「七十間御多門御門之外」側へ通行した。これは小者の承り違いによるものではあるが、迷惑をおかけしたという詫状であった。これらに依ると、金谷門の南側に住居する養叔は、通常はもっとも近道の金谷御門を通らず登城したものとみられ、甚右衛門坂を通ったのであろうか。或いはこの時の養叔の行き先は、位置から見て二ノ丸だとすれば七十間御門の外側は遠回りになるゆえ、「御次」というのは二ノ丸ではなく、金谷御殿だったのであろうか。詳細は不明である。

こうした金谷御門の通行について、のちに記された「落葉集」（金沢市立玉川図書館後藤文庫蔵、後藤彦三郎〈1756～1828〉筆）では「昔ハ金谷御門辺往来之由ニ候処、御城中与相成、金谷御屋形も被仰付候故、往来御停止相成候よし」と見えるなど、元禄元年段階では通常は金谷御門の通行は停止されていたことがわかる。

なお、幕末期金沢城代の奥村栄通筆の「官事拙筆」（玉川図書館奥村文庫、38 巻）嘉永5年9月6日条に依れば、年寄の金谷門の通行について、従来御供として挟箱持ち、草履取の各1人ずつの御定であったが、金谷御門内も「当時二ノ御丸格合ニ付」以後は、「御定之外、小者壺人召連」でも通行可能となった。同時に、この外、雨降りの際は傘持ち1人の供連れも指支えないとされた。このような各身分別の藩士らにおける城内の各御門の通行や順路の解明も今後の課題である。

ところで、江戸藩邸で井関玄悦（曲直瀬玄朔の弟子）が人参膏を製造するため、元禄元年11月金沢か江戸藩邸の土蔵か詳細は定かではないが、土蔵内の人参の調査が開始され、養叔が在庫の人参はまだ用立つと答えている。さらに人参の員数調が江戸へ命ぜられ、12月11日養叔は江戸藩邸勤務の嫡子堀部養碩よりの調査に基づき、136匁余りの壺の人参は宜しいが、中には「虫入申人参」も余程有り、70目余りの壺については古くなったため、馬や鷹の薬に用いていると上申する。同月15日136匁余りの分は玄悦に製薬させ、翌2年1月28日江戸の玄悦より出来上った人参膏1器が金沢に到来、玄悦による封印は綱紀の御前で開き、養叔へも人参膏が少々下賜され、また、家臣らにも願出次第で付与されるという仰があり、端玄川らが再び封をした。

ともあれ、幕末の事例ではあるが、「成瀬正敦日記」（嘉永元年11月12日条）によれば、藩主周辺の諸々の事情に関し、世上への漏洩を戒めるよう申談ぜられているように⁽¹⁵⁾、医者は、もっとも藩主サイドに近侍したことはいうまでもなく、それゆえに、近世前期から信頼できる医者が重用されたのであろう。

3 綱紀の子女の診療と金谷・二ノ丸御殿の利用

藩主綱紀の子女の診療と金谷・二ノ丸御殿の利用等に関して、次にみていきたい。これについては、同様に「前田貞親手記」より主要な内容を〔表3〕に示した。

金谷出丸には、文庫・書院・馬場が寛文期ころより整備されていたが、豊姫移住を機に貞享4年6月以降御殿の作事が開始され、同所は少なくとも同4、5年には前田家の一部の女性たちの居住空間として機能し始め、同5年（元禄元年）6月豊姫は前田佐渡邸より金谷に移住した。以降は引続き〔表3〕でわかるように、9月には、豊姫は吐乳など体調不良となり、端玄川が治療に当たり、綱紀はじめ藩老や家老らは頻繁に金谷御殿を見舞いに訪れている。豊姫はその後回復し、10月には一時的に二ノ丸御殿に引き移り、11月同御殿で病氣回復祝の御能が催され、医者らも薦ノ間で拝見、料理を頂戴する。

一方、同月金谷の詰番人を4人から20人に増員することとなり、同所の居住機能の充実化が図られた。翌元禄2年閏正月、金谷の作事勤務者褒賞員数が上申され、雪が消え次第、作事が再開されることとなった。同月27日豊姫は金谷に帰殿し（前稿）、藩老らの豊姫の御機嫌伺は2～4日に1回となり、参上の往来は松坂門通行も可能となる。続いて2月には金谷で敬姫が誕生、藩老ら重臣も金谷や二ノ丸で祝詞を申し上げ、また、豊姫の灸治は山科理安・端玄川が担当した。4月には横山正房邸で男児久丸が誕生、御祝の幟も準備されるが、5月の母大慈院死去のほぼ3週間後に様躰が悪しくなり、山科理安の投薬治療も叶わず死去する。この間久丸生存中は藩老らも右若子誕生の祝詞に金谷に参上、一方、金谷作事方への下賜品請書が進上される。

なお、同年4月には金谷の御鳥部屋で黒鶴子が出生し、8月には熊鷹が、また、10月には鴈が同所に混入し、ともに捕獲が申渡されており、金谷の施設上の動向を知る上で興味深い。一方、同年6月には二ノ丸の竹ノ間（御広間）⁽¹⁶⁾で書物の虫干が申渡されているが、先年は本丸で行なわれていたところ、畳などが古くなったためという。

引き続き元禄3年（1690）敬姫の髪置祝が金谷で行なわれ、同4年、同じく金谷で誕生した富五郎（4代大聖寺藩主前田利章）は、同8年初めて観音院へ参詣する。この時恭姫・豊姫・敬姫も同道、山科理安・堀部養叔ら医者7人も随行し、帰路「蓮池之上御屋敷」へ入り、祝済み、金谷へ帰殿する。この蓮池の上屋敷でのお祝いについて、綱紀の関わりは不明である⁽¹⁷⁾。なお、翌9年8月二ノ丸は増築中のため、綱紀は参勤を終え、帰国してこの蓮池邸に入るが⁽¹⁸⁾、これ以前にもしばしば同屋敷を訪

〔表3〕綱紀の子の診療と金谷・二ノ丸御殿の利用等（「前田貞親手記」21～38巻より）

元禄元年	9月2日綱紀6半時金谷御殿へ入られ、午半刻御帰り。3日朝、綱紀7半時過金谷へ御入になり、9時前御帰り。豊姫御滞りにつき、御見舞に藩老・家老らも金谷へ出向く。豊姫御気色昨日より快然く端玄川が担当。4日綱紀7半時金谷へ御入り、9時御帰り。安房ら藩老も御見舞。豊姫御滞り。5日豊姫授乳5、6度、吐乳なし。綱紀金谷へ入殿。安房らも御見舞。6日綱紀金谷へ入殿。安房らも御見舞。豊姫黒い筋交りの白きかたまり吐乳。その後回復。薬調進く端玄川が担当。8日綱紀9時仏殿へ参詣、後松坂より金谷へ向け入殿。10日綱紀金谷入殿、安房らも豊姫の御機嫌伺に参上（11・13・14・16日も金谷へ参上）。18日綱紀4時過金谷へ入殿。安房らも参上（19・20・21・晦日も金谷へ参上）。19日綱紀金谷へ4時入殿（20日は9時過に、21日は9時前に入殿）。 11月6日豊姫（当時二ノ丸に居住）病氣本復につき御能興行、医者は蔦間辺にて拝見、料理頂戴。14日豊姫9月3日頃より御不快、18日金谷の詰番4人充の所、20人に増員と命。
元禄2年	閏正月5日昨年金谷作事勤務者に褒美に付員数等上申、雪消次第作事再開予定。27日豊姫金谷へ入殿。佐渡等重臣ら参上。28日金谷の豊姫へ佐渡ら重臣の御機嫌伺は2～4日に1回とするよう命。参上の往来は松坂門通行も良しと仰。29日豊姫の見廻として恭姫金谷へ入殿、のち再び二ノ丸へ御帰り、其後御帰宅。 2月22日金谷にて敬姫誕生、筑後・信濃ら参上の旨仰。25日藩老・家老・若年寄、各々金谷へ参上、祝詞申上。二ノ丸にても恭姫へ申上。28日佐渡父子金谷へ参上。 3月1日御産婦（大慈院）昨夜横山筑後正房へ移徙。3日上巳の佳節に付、藩老・老中・若年寄金谷へ参上。18日豊姫灸治につき山科理安・端玄川上申。身柱に灸する。 4月14日安房ら重臣金谷等へ参上、若子誕生祝詞申上。金谷屋敷御鳥部屋の黒鶴子2つ出生（1つは5月15日死去）。18日久丸御七夜に付、安房ら3人筑後宅へ参上。22日金谷屋敷作事方等への下賜品請書進上。28日若子様久丸と改名。来月のぼり設置につき細工奉行へ申渡。 5月11日久丸母（大慈院）死去 6月2日横山筑後宅の久丸様躰悪く、山科理庵投薬治療叶わず死去、安房ら重臣詰る。4日書物虫乾去々年通り二ノ丸竹ノ間にて行なうこと申渡す。5日久丸尊骸納棺、仰有る迄筑後宅にそのまま安置。20日久丸葬礼宝円寺にて執行。 8月25日（金谷屋敷の巢親鶴の鳥屋の中へ熊鷹が入り、捕獲につき達。） 10月朔日（金谷の鶴部屋の鶴捕獲につき仰。）
元禄3年	9月21日敬姫金谷にて髪置祝。
元禄8年	5月6日富五郎初めて観音院へ参詣。恭姫・豊姫・敬姫も参詣。帰路蓮池の上屋敷へ入り祝済み、金谷へ入殿。9日右富五郎参詣御供につき、山科理安・磯野道順・堀部養叔・矢田周閑・堀宗叔・久保寿静・同定興らへ慰労金品下賜。
元禄10年	5月朔日二ノ丸大広間にて出仕人御目見、奥書院にて役替仰渡、藩老ら金谷広式へ参上。綱紀蓮池上屋敷へ入られず、金谷へ御入殿。 6月6日二ノ丸御新宅御移徙につき、子女より御献上等。御新宅柳ノ間より通られる。18日町医師岡村順悦「御広式御用」勤めにつき居屋敷拝領が許可される。

れている。続く同10年（1697）5月二ノ丸広間で出仕人が御目見え、奥書院で役替が仰渡され、一方、藩老らも金谷へ参上、綱紀も蓮池の上屋敷に入らず、金谷へ入殿する。同年6月二ノ丸御新宅移徙につき、子女より祝品の献上が行なわれ、詳細は不明だが、この際新宅の柳ノ間より通行した。因みに、当時の新宅造営など建物の様子に関しては「金沢城座敷之図二ノ丸」（石川県立歴史博物館蔵）の図が知られる⁽¹⁹⁾。

また、同月町医師岡村順悦が二ノ丸での診療を命ぜられたため、居屋敷の拝領が許可されている。ここでは、前述のように藩より屋敷地拝領（貸与の場合を除く）の町医者の事例－（ア）親と同様医師が上手な場合、及び（イ）町医者身分のまま藩の重臣等より知行を授与され鍼科として特別に許可された場合－とは異なり（ウ）二ノ丸での診療を拝命したがゆえに、居屋敷が下賜される町医者がいたことが確認できる。因みに（イ）の場合は特殊な例であろうが、（ウ）の場合はいずれ（ア）の場合へと変化する場合や、（ア）ゆえに（ウ）に至る場合なども近世全体の中では、この後もあり得ることが推測される。

4 京都より下向の医者と城内での活動

前稿で触れた津田寿軒は貞享5年（元禄元年）7月16日、京都より豊姫の診療のため金沢に下向する。同人はのちの藩医津田正流・寿軒（静嘉堂文庫「加州金府城下図」〈旧池上家文書＝藩老奥村助右衛門家の大工〉、「諸士系譜」）らの祖とみられる。以下、「前田貞親手記」などにより京都と金沢を往復して診療に当たった医者の方角について、大石玄哲・同三折・山科理安・亨徳院・南保玄達・同玄隆・馬嶋柳庵の事例から素描しよう。

①大石玄哲・同三折

寛永19年「小松侍帳」に登載されている藩医大石玄哲に関して（〔表1A〕〔表1B〕）、500石で小松の細工町居住と見え、のちの「寛文七年図」によれば、金沢ではC地区に屋敷を拝領し（前稿）、寛文7年没している（「諸士系譜」）。が、翌8年「加越能士帳」（〔表1B〕）では、大津着米200石、ほか25石加州米と記載のあることからすると、右500石は500俵の誤記の可能性もなくはない。また、作成時期に詳細な調査が行き届かなかったのか、没した翌年の侍帳にも登載されていることになる。このようにみていくと、寛永期当時は小松細工町に屋敷を拝領していた大石玄哲は、いつの時期からか不明だが、おそらく、ある一定の期間、京都と加賀に住み、両地を往復していたものと解せる。さらに、玄哲の嫡子三折は「延宝図」では、「寛文七年図」中の父と同地番に居住し、寛文11年侍帳（〔表1B〕）では大坂着米400俵と見え、同人もある時期まで京都と金沢を往復していた可能性はある。しかし、三折は延宝期以降の侍帳には大坂着米の記載がないことから、少なくとも延宝以降は金沢詰に定着したのではなかろうか。

②山科理安

小児医師の山科理安について、「元禄元年侍帳」では同長安の名が記載されているが、理安は無記載である（〔表1B〕）。右侍帳及び「諸士系譜」では長安は600俵、延宝9年召出、元禄元年没と見え、一方、理安は「諸士系譜」では200石、元禄2年召出（藩医として正式な出仕カ）とし、両者は別家扱いであるが、ともに慶長期の山科長庵の後裔とみられるものの、両者の詳細な関係は現時点では不詳である。理安などについて以下、「前田貞親手記」よりみていこう。すでに元禄元年9月朔日二ノ丸の表御居間、御焼火ノ間の縁辺で御目見し、扇子を献上。子女の療治に出精したと挨拶し、のち金谷へ入殿する。当時右表御居間と御焼火ノ間は隣接しているという⁽²⁰⁾。続いて7日には白銀・羽織拝領の御礼のため登城の義が上申され、12月18日には、綱紀は去13日の京都より不破・岡島宛、理安の来書を御覧になる。その内容は、先頃京都より金沢へ下向の折の諸事懇意の礼を述べ、禁裏より御咎が有ったが、昨日赦免となり、再び金沢行きの事内々仰の旨御請したゆえ、藩老へ取成しを依頼するというものであった。

かくして、翌元禄2年2月29日に23日付、在京の理安より不破・岡島宛に、金沢への下向を禁裏へ断り、追付罷下る由来状あり、これに対し、藩は姫様方も誕生され、「小児医師」が必要なので、ご参勤前に金沢に到着するよう申渡した。3月5日理安は金沢に到着。8日昼頃広式へ参上し、姫の診

察を拝命、3月10日南保玄達らと表御居間にて着座、焼火ノ間御縁辺にて鳥目100疋を拝領、御目見する。のち広式へ参上、両姫を拝診、慶（敬）姫が一段快然となり、生得御実性の旨の覚書を上申するなど、理安は二ノ丸へ誘引される。3月19日には御判物頂戴に参上しており、「諸士系譜」の記載が元禄2年出仕とする根拠が、ここにあるものとみられる。ともあれ、3月25日御能を拝見、奥書院「二ノ間西ノ御縁辺」にて料理を拝領し、翌日御礼に参上する。続いて元禄3年6月18日、御留守居中精勤、御広式へ参上し、姫方の薬を調進、御回復につき、銀子・時服を拝領する。また、元禄8年5月9日、理安は富五郎らの観音院参詣御供の慰労として、晒布二疋を下賜されている。

③亨徳院

元禄2年1月14日、亨徳院の妻女が京都にて昨秋より病となり、暮には重病に至った故、京都へ一度帰ってそれを見届けるため、亨徳院は御暇願を岡嶋・不破宛に届け、許可される。この亨徳院は明治3年曲直瀬安治郎「先祖由緒并一類附帳」によれば、曲直瀬正淵といい、亨徳院玄承の嫡子で、延宝5年江戸にて300俵で出仕、相続するが、藩主綱紀が「御在国之節御国江隔年相詰」、享保4年（1719）京都にて没する。同家は日本医学中興の祖で前田利家に仕えた曲直瀬道三正盛（文禄3年没）を初代に、以後道三正純（慶長16年没）―道三正因（元和元年没）―道三正専（寛永元年没）―玄與（寛永20年没）―玄承（延宝5年没）―正淵と続く。寛文11年「侍帳」に登載されている亨徳院は玄承で、500俵であるが（前稿）、右「先祖由緒并一類附帳」に依れば、同人も含め、正純以降すべて亨徳院と称し、かつ俸禄は「合力米」（手当米）と見える。

④南保玄達・同玄隆

次に、「元禄元年侍帳」（〔表1B〕）には無記載である南保玄達及びその嫡子玄隆についてみよう。南保玄達は元禄2年3月3日、京都より昨晚到着、前述のように同月10日山科理安らと表御居間にて御目見、鳥目100疋を拝領する。19日（18日とも見える）内山三清とともに、知行拝領（「諸士系譜」では400石）の御礼銭を献上する。24日京都への参上と金沢への下向の具体的日にちは、様子次第と仰を請ける。

また、元禄10年2月25日には南方（保）玄隆（「諸士系譜」享保9年600石）と市井友仙との屋敷願替の書付が藩に提出され、閏2月10日玄隆は金沢へ引越に付、綱紀の「御留守中」は医者不要ゆえ、当節は御暇を出し、5月中旬引越の旨の覚書を提出し、翌日綱紀が御覧になる。これらは、京詰の医者が主に綱紀在国中金沢へ下向して診療を重ね、やがて金沢移住となる好例である。翌11日岡嶋一郎兵衛は当春初頃より南保玄隆の投薬を受けているゆえ、この間少し患っていたことがわかる。23日、玄隆の上京に備え、南保玄仲（玄隆弟、享保9年150石）等へ留守中火の用心の見廻りを頼置く旨の書付に、寺社奉行が添書している。さらに、28日一柳監物が発病した場合に備え、応診するよう南保玄隆らに仰あり、5月13日玄隆は京都より妻子を連れ、金沢へ引越すことになる。

なお、南保玄隆の後裔には文化期二ノ丸造営時の医療に携わった南保玄隆（生年不詳～1837、10人扶持）がいる⁽²¹⁾。

⑤馬嶋柳庵

馬嶋流眼科（南北朝期清眼創始）の馬嶋柳庵については、元禄2年3月24日御発駕以後、京都へ参るよう申渡される。このことも南保玄隆の事例と同様、綱紀が在国の時は京都より金沢へ下向し、綱紀が江戸へ参勤になると、再び京都へ帰るという藩医の事例を示している。さらに、元禄10年5月6日柳庵の勤務につき、綱紀が御在国中は、金沢にて勤務するよう申渡された。しかし、柳庵は病につき、少し遅参の旨を上申するものの、15日には京都より参上する。この時子共9人は初て御礼、御目見を

賜わっている。因みに柳庵の父の馬嶋大知坊については、延宝3年「侍帳」([表1B])に300石とあるが、寛文11年・延宝5年・元禄元年の各侍帳に、金子5枚とあることから、これは誤記とみられる。また、延宝5年「侍帳」([表1B])に「御かし小屋」と見え、大知坊・柳庵父子の京都の住まいは三條河原町の藩邸内⁽²²⁾の貸家であった。

なお、貞享期金谷御殿等で豊姫らの診療に当たった坂井泰順の養子坂井順元(小瀬復庵、430石)は、元禄2年2月12日、京都へ学問修業のため、御暇願を岡嶋一郎兵衛(寺社奉行)と不破彦三(奏者番)〔「諸頭系譜」〕宛に出しており、元禄期加賀藩から京都への学問修業の一端が窺える。

5 藩士等の治療

元禄2年3月6日、御徒横目佐伯三郎右衛門が当番にて二ノ丸へ出勤したところ、発病し、「当番之御医師大石三折」などが付添い、御貸小屋へ帰宅させたが、養生叶わず死没した。大石の診断の結果、病名は「中風」または「食腸」による病死という報告が成されている。このように、藩医は城中に当番で詰め、出勤中の藩士の治療をも担当した。また、加賀藩へ御預けで禁錮を赦免されていた伊予西条藩の元藩主の一柳監物(直興、1624～1702)の病気に際しては、元禄10年閏2月28日同人の発病時には南保玄隆・堀部養碩・磯野道順・坂井順元・久保寿静・久保貞興・赤佐正軒といった本道・針立の医者らが応診するよう命ぜられた。

なお、右磯野道順は同月5日は両肩の痛みと手足のしびれのため、山代温泉へ湯治に三廻り(三週間)の御暇願を出し、翌日許可され、また養碩の父堀部養叔も(すでに元禄7年74才にて致仕)同月身筋を痛み、同様に山中温泉へ三廻りの御暇願を出しており、医者 of 養生の一端を知ることができ、興味深い。

おわりに

以上、近世前期の医者の概要と元禄元年より同10年まで金沢城内での医療及び金谷・二ノ丸御殿の利用についてみてきた。第一に、「寛文七年図」・「延宝図」において、今後医者に関して個別に他の史料を精査していくことにより、訂正すべき箇所も出来る可能性もあるが、今回少なくとも医者はすべて総構堀の内側ないしは、その近辺に屋敷を拝領している結果を得た。これらの中には、町医者も含まれる。すなわち、当時上級武士より知行を拝領する町医者身分の者も存在し、これらを含めた町医者も、万治2年の定書により、以降藩より屋敷を拝領するケースや地子銀を納入することで藩より借家住まいする医者も存在することがわかった。彼らのなかには、藤田玄仙・渡辺玖庵・磯野玄察・黒川寛針・岡村順悦らのように、一時的・部分的に藩医と同様、藩主前田家など城内の医療に携わる者もあり、また、中には町医者身分であるがゆえに、侍帳に登載されないが、城下町絵図に記載される場合もあり得ることがわかった。ただ、いつの時期にその身分であったのかといった問題、いわば町医者か藩医かの身分比定に関して特に留意する必要があるだろう。つまり、町医者でも医術に優れ、藩当局に認められれば、一時的に、或いは恒常的に藩医と同様、藩内の医療に携わる場合もあった。

いうまでもなく医者は特に生命に関わる職業で、技術・知識の高さの評価がものをいう分野でもあることから、当時前田家や藩に仕える少知行・少禄の医者の身分は、特に流動的であったことも考えられる。したがって、個々の医者の身分や活動・役割について、今後は、可能な限り、時期が判明できる信憑性の高い史料から考証を重ねることが肝要であろう。

第二に、慶長期から元禄元年の侍帳をみると、藩士全体に占める加賀藩の医者は、1～2%程度に過ぎないが、高知行・高禄の者は300石或いは600俵ほどである。医者の人数は、慶長から元禄元年にかけて、およそ10人～29人ほどで、時代が下がるにつれ増加傾向にあった。彼らは慶長・元和期頃は無役衆、或いは寛永頃までは薬師衆、さらに万治以降は組外組(衆)として組織された。また、万治以降、組外組の中における医者の割合は29～43%ほどで、医者全体の人数増加に伴い、その割

合も次第に高くなっている。さらに、元禄元年の医者を中心にみると、藩医としての祖形はほぼ慶長期から見えるが、寛文以降に彼らの医家としての初出も多く、このころ藩医としての職制もほぼ固定化しつつあり、藩主家及び藩内における医療の充実化が図られつつあったといえよう。しかし、以後もなお新規の取立ては少なくないものとみられる。

また、藩医は近世中期以降は寺社奉行の支配下に入るが、少なくとも延宝 5 年の侍帳の中では奏者番の裁許下にあり、貞享・元禄頃には奏者番や寺社奉行裁可の事例もある。近世前期にはまだこうした支配・裁許や申渡・上申など伝達システムといった点で流動的部分も認められるゆえに、今後他の史料より藩医が寺社奉行による単独・一本化支配になる初出時期の検討も課題となった。

第三に、藩主綱紀は頭痛・痰・御痞等の持病があったが、元禄期でも相変わらずこれらに苦しみ、齒茎の腫れや発熱、風邪、腰痛、痔痛も起こり、二ノ丸の御居間廻りにおいて、主治医の堀部養叔により御灸、煎薬・丸薬の投薬の治療が行なわれた。養叔は金谷出丸の南側、西内総構堀と西外総構堀の間に居住し、前田家の医療にもっとも信頼篤く、人参膏の在庫調査にも尽力する。が、小者の聞き違いにより、緊急時の通行も当時禁止されていた金谷御門を乗物で通行し、詫状を提出することもあった。ここでは金沢城の一御門の通行に関して少しく垣間見ることができた。

第四に、金谷出丸では貞享 4 年御殿の作事や詰番も開始され、翌 5 年（元禄元年）綱紀の娘豊姫が居住し、詰番の人数も 4 人から 20 人に増員となり、元禄 2 年段階でも依然として御殿拡充の作事が進行中であり、同御殿の居住空間としての充実化が図られている。以降同 4 年の間、金谷御殿では豊姫の吐乳などの体調不良の治療には、端玄川・山科理庵が担当したが、敬姫の誕生や髪置祝、富五郎の誕生があり、重臣横山正房邸では久丸が誕生するなど、これら子女の諸祝や病氣見舞などのため、綱紀や重臣らがしばしば金谷へ入殿していることがわかった。また、久丸の病気に対しては、山科理安が治療するが、生後 2 ヶ月足らずで早世する。一方、元禄元年豊姫は一時的に二ノ丸御殿へ引移り、病回復祝に同御殿で御能が催され、医者らも蔦ノ間で観能し、料理を頂戴する。翌 2 年には去々年と同様、二ノ丸の竹ノ間で書物の虫干が行なわれる。また、同御殿の新宅建設も進み、元禄 10 年 6 月、綱紀に新宅移徙につき、子女より祝品の献上が行なわれたことなど、金谷・二ノ丸両御殿の利用について素描した。

第五に、京都と金沢を往復する医者として、万治以降、大石玄哲・同三折の場合、大津着米・加州米・大坂着米といった拝領石高や拝領屋敷地の住所から考察した。次に、山科理安・亨徳院・南保玄達・同玄隆・馬嶋柳庵の事例から、元禄期彼らが綱紀の在国に伴い、京都から金沢へ下向し、逆に綱紀が江戸参勤になると、京都へ帰り京詰めとなる事例を挙げた。彼らの中には亨徳院や馬嶋のように、京都の藩邸内の御貸家に住む者もいたが、近世中後期、子孫のなかには金沢へ引越し、金沢詰めの藩医となるケースも少なくない。また、彼らは医者の中では比較的高知行・高禄の者が多く、医学の進んだ中央の医者として高名であったがゆえに、加賀藩へ臨時的な出仕、或いは常雇用されたものと解せる。

第六に、二ノ丸へ出勤中の藩士に対する治療は、大石三折の事例を窺い見た。また、元禄 10 年一柳監物の治療対策として、南保玄隆・堀部養碩・磯野道順・坂井順元・久保寿静・同貞興・赤佐正軒といった本道・針立らに往診が申渡された。こうした出勤中の藩士やお預かりの大名に対する藩の手厚い対応や保護の様子と医者の実務について垣間見た。

今後、城下町絵図に示された屋敷の規模に関わる問題や近世中後期の医者の動向と金沢城内の各部屋・施設の具体的な利用についての考察、ひいては他藩の医者との比較検討などが課題として残された。

〔註〕

- (1) 田中喜男『城下町 金沢』日本書院、昭和 44 年。同『加賀藩における都市の研究』文一総合出版、昭和 53 年。
同『幕藩制都市の研究』文献出版、昭和 61 年。池田仁子「近世寺院の女性生活史断章 ―加賀金沢瑞泉

- 寺文書調査より―」（『加能史料研究』14号、平成14年）。同「金沢城代横山家と重臣 ― 加賀藩藩老と陪臣にみる城下町の生活 ―」（石川県金沢城調査研究所『研究紀要 金沢城研究』7号、平成21年）。
- (2) 前川哲朗「疱瘡・コレラの流行と対策 ― 藩政期疫病史の試み ―」（『市史かなざわ』6号、平成12年）。竹松幸香「加賀藩上級武士の疾病・医療について」（『加能地域史』47号、平成20年）。
- (3) 津田進三「日本最初の蘭方内科医吉田長淑」（『石川郷土史学会々誌』8号、昭和50年）。片桐一男『蘭学、その江戸と北陸』思文閣出版、平成7年。沼田次郎『洋学』吉川弘文館、平成8年。池田仁子「金子鶴村の蘭学と海外・科学知識 ― 化政期加賀藩蘭学受容の側面 ―」（『日本歴史』698号、平成18年7月）。同「加賀藩蘭学と医者との動向」（『北陸史学』55号、平成18年）。同「金沢城代横山家の出生にみる家臣と医者と女性」（『研究紀要 金沢城研究』6号、平成20年）。同「大高元哲の事績をめぐって ― 加賀藩蘭学の受容と展開 ―」（加能地域史研究会『地域社会の歴史と人物』北國新聞社、平成20年）。同「医者と暮らしの諸相」（19世紀加賀藩「技術文化」研究会『時代に挑んだ科学者たち』北國新聞社、平成21年）。
- (4) 木越隆三・池田仁子「藩老横山家の3枚の下屋敷図について」（『研究紀要 金沢城研究』6号、平成20年）。
- (5) 石川県金沢城調査研究所「解説した『寛文七年金沢図』の人名データ」（『研究紀要 金沢城研究』8号、平成22年）。
- (6) 木越隆三「『寛文七年金沢図』の藩士配置と都市計画」（『研究紀要 金沢城研究』8号、平成22年）。
- (7) 池田仁子「『寛文七年金沢図』等にみる医者の居住地と城内での医療」（『研究紀要 金沢城研究』8号、平成22年）。
- (8) 二ノ丸御殿に関する研究は、田中徳英「金沢城二の丸御殿の用途による部屋の構成」（石川県金沢城研究調査室『研究紀要 金沢城研究』3号、平成17年）、石野友康『葛巻昌興日記』にみる金沢城二ノ丸御殿の呼称と用途（『同』5号、平成19年）がある。
- (9) 日置謙『加能郷土辞彙』改訂増補版、北國新聞社、昭和48年、「金谷御殿」の項。『金沢市史 通史編 2』金沢市、平成17年、98頁。
- (10) 見瀬和雄・見瀬弘美「加賀藩改作法施行期の家臣団史料 ―『古組帳抜萃』―」（二）①、金沢学院大学紀要「文学・美術・社会学編」7号、平成21年、231頁。なお、「古組帳抜萃」の翻刻については、右のほか、同じく両氏による同②、同紀要、8号、平成22年がある。
- (11) 松方冬子「加賀藩の機構と江戸家老」（『史学雑誌』102編9号、平成5年9月、29頁）及び木越、前掲(6)参照。
- (12) 『加賀藩御定書』前編、石川県図書館協会、昭和56年、44・45・90・91頁。なお、藩より拝領の藩士の屋敷地の規模について、慶長16年、高知行の者は除き、主なものをみると、700石より500石までは20間四方、400石より300石までは15間20間、200石より150石までは10間20間と定められたが、万治2年に700石より500石までは400歩、400石より350石までは300歩、200石は200歩、100石は170歩、90石より60石と切米100俵までの者は120歩、町医者並は170歩などと規定されている。すなわち、100石を除く100番台の知行の者の分が曖昧となり、それ以下の少知行・少禄の者及び町医者並の分が追加されている。右においては、200石未満より100石までは170歩と解釈できるのであろうか。また、ここで重要なことは、町医者並の者も170歩の屋敷地が与えられる可能性のあったのは万治2年であった点である。
- (13) 前掲(12)、93・96・97頁。
- (14) 金沢城調査研究所、前掲(5)。
- (15) 前田育徳会『加賀藩史料』藩末篇、上巻、昭和55年、復刻版、清文堂、78頁。
- (16) 石野、前掲(8)37～39頁。
- (17) 蓮池の上屋敷での御祝については、長山直治『兼六園を読み解く ― その歴史と利用 ―』（桂書房、平成18年）にも記述が見えるが、綱紀の関わりは触れられていない。
- (18) 前掲(15)5編、357～358頁。
- (19) 石川県金沢城調査研究所『よみがえる金沢城』2、平成21年、34頁。
- (20) 石野、前掲(8)39頁。
- (21) 池田、前掲(3)「加賀藩蘭学と医者との動向」。
- (22) 前掲(15)、編外備考、173頁。

[付記]

本稿執筆に当たり、金沢城調査研究所の木越隆三・石野友康の両氏に大変お世話になった。衷心より感謝申し上げます。